

淡江社だより

第1号

平成9年5月発行

筆の心について

乾 文子

昨日までの趣味としての書道は次第に一般化され、各方面に進展致して参りまして、處々に展覽會が開催せられ、又書に関する色々の事業が企てられて参りました。

今迄、比較的等閑視せられて居りました學校の習字教育も多少問題となつて参りましたことは、大変結構なこと、存じます。此處に私共はもう一步退いて考へなければならぬ事がございます。それは習字と云ふものが、一般に唯先人の遺した形だけを真似る事にのみ専念して居りますことで、少し時代離れのした方法ではございますまいかと思ふのでございます。此の事は、従来の習字は手本の模寫が主で、文字はもとより筆に對する認識さへ缺けがちであつたといふ事でございます。と申しましても、いま、で筆法が全然なかつたわけではございませんが、たゞ字型を模倣しやうとする為に無理な筆使ひが多々あるのでございます。例へば「横せんと欲せば先づ^{たて}豎せよ」とか、「豎せ

んと欲せば先づ横せよ」とか、又筆のつき方はしつかりとつかなければならぬ、筆を抜く時には勢よく等と申します程度で、如何にします。為に御手本と異つたもの、出来ました時、後から之をなぞると云ふ様なことになつて参ります。

筆には筆の一番無理のない合理的な用法がなければならぬと存じます。

私共が他人の聲音を真似致しましても、それは真似であつて決して自分の聲にはなりません。これと同様に、他人の書風を真似たからと言って決して自分の字にはなりません。やはり自分の持つて生れた自分の字であり、自分の癖をもつた自分のものでございます。

習字をすることも、つまり自分の持分を充分に生かして之を啓發することにあるのでございます。斯う考へて参りますと、私共は筆の使い方を知ればよいのでございます。

毛筆を御覧になると其の形状でも御理解になる様に、毛筆は太い字も細い字も書けると云ふ特徴を持つて居ります。従つて鋒先^{はさき}を開かせる事とあつめる事が自由に出来ましたならば筆は使へる

発刊のつとめ

大岡 明男

淡江社に機関紙（通信）のようなものを作ることは、長江先生ご在世中より、何度かお話があつたのですが、ついに手を着けることなく今日に至つてしまいました。

このように数年間懸案となつていたものが、この度皆様の熱意と協力により、やつと実現の運びになつたことは、ご同慶の至りと存じます。

しかし、實際にとりかゝるとどのようにしたものかと、苦心いたしました。幸い淡江先生の夫人（即ち長江先生の母上）初代玉江先生の「筆の心について」と題する小論文が発見されましたので、之を先づ掲載させていただきまします。長江先生に書いていたゞけないのが何より残念であり、このように遅れたことを申し訳なく思います。

引き続き2号、3号と漸次充実したものにしたい、淡江社内の人々の団結の絆となるように育て、行き度いと思ひますので、一層のご協力をお願いいたします。



のでございまして、自分の思ふまゝに鋒先を擴げ又はあつめる事の練習が、私の解きます「十畫」の基本筆法でございまして。

「十畫」の基は「點」でございまして、此の點の用ひ方で十の畫が生れて参ります。此の十畫を應用致しますと、全ての字畫が出来上るのでございまして。この基本の點と申しますのは、筆の下し方そのものでございまして、鋒先の裁き方で筆はどのうにでも御してゆくことが出来るのでございまして。

こゝに一點を知る事は、一畫を知る事であり、一畫を知る事は、十畫を知る事である。筆を知り、書全体を知ること、なるのでございまして。

以上の基礎を知ると同時に、又、文字を理解しなければなりません。文字を理解するには、先づ文字の姿を知る事でございまして。文字には各々似合ふ姿があります。畫の多い字、少い字、長い字、短い字、小さい字、大きい字と云ふ様に、文字は様々な姿をし、夫々の要素を持って居りますが、其の釣合をとってみますと大体整つた字型を作り上げる事が出来ます。此れは獨り楷書ばかりでなく、行書、草書についても同じことでございまして、如何なる字畫が如何に省略せられて斯うなるかと云ふ事を少し知りますれば、容易く行草を理解することが出来るのでございまして。従つて假名も草書の一部として同じことが申されるのでございまして。斯うして筆を理解し、文字を理解して初めて自分の字が生れて参ります。こゝで習字とは、

單なる模寫でなくして、國字を理解し、筆を理解し、自分を生かすといふ事でございまして。

此の自分を生かす域に至つて、初めて文字に對する美の鑑識が生れて参ります。字畫と字畫との配置、その調和、筆觸の強弱といった繊細な觸手にまで觸れる事が出来るのでございまして、此の様に精神が磨き澄まされて参りますと、次第に自分の品性も高めずには居られない事になって参ります。

書道の修養性とか、書に其の人の風格が表れるとか申します事も、此處に至つて初めて領けるのでございまして。

些細な筆の先とは申しますものゝ、それが細かければ細かい程、より多大の注意が必要でございまして。極めて細心な心構へで、其の鋒先の中にある筆の心を引き出して頂き度う存じます。

筆の心は私共の心でございましてから。

(資料提供 乾 たちみ)

註 本文は昭和十四年頃書かれたものと思われる玉江先生の文章をそのまま掲載したが、句読点については文意を推しはかつて若干つけ加えていまして。



書壇と一線を画し、

書の王道を往く

(『書道芸術』一九九四・三より転載)

乾長江氏は父母の淡江・玉江氏によつて創立され確立された書法を守り、今日の書壇の流れとは無縁に一筋の書法の伝統を守つてきた今日では稀有な書道人である。

この一月(一九九四)淡江氏の出身地でもある山梨県立美術館講堂と白洲浅川画廊において旧作に新作を加えた七〇点近い作品による「乾長江書作展」が開催された。これを一見して、所謂今日の日本の書壇の書とは何と異つた、しかも新鮮にして清尚な書かと眼を疑うばかりであつた。

明治・大正・昭和、そして平成と日本の書は実にめまぐるしく変貌して来た。あまりにも造型美術の本家を西欧と誤認し、全く独自に成立した歴史を持つ書までも西欧化せんと試みられたのである。

その実態がどのようなものか公募展と称する会場に一步踏み入るなら開眼の士には一目瞭然の筈である。

長江氏の書の衣鉢は多くの人々によつて受け継がれなければならない時節に來ていると言えよう。



心の中の長江先生

一期一会

武藤見恵(素英)

長江先生に初めて私がお会いしましたのは、昭和十二年四月、先生が文化学院女学部の習字担当教師として私共二年生の教室にお出ましになられた日でした。

それまでのお習字の時間、一年生の時はたゞお手本をマネして書きますと、二重丸、三重丸をつけられて、騒がしい生徒達を時間中「ヨシワラすずめのようにうるさいなあ」といく度もお小言をいわれた七十才代のおじい様先生でした。

今度新しくお見えになった乾長江先生はやつと三十才になられた位のお若さで、たいていお着物に袴を召して歌舞伎俳優の染五郎のように整然としたお姿でした。教室では一点一劃の筆の使い方もおろそかになさらない大変厳しい先生でした。したがって、仲々お丸はいただけませんでした。それは基本筆法の稽古で、四十人余りの生徒の一人々々の手を持って懇切丁寧に御指導下さいました。

さすがに、ヨシワラすずめも静まり、子供心にも書道稽古の厳しさと、先生の清廉潔白な御人格を感じ取りました。四年になるとかなをお習いし、白秋の「からまつ林」や「うぐいすがないている

のでこどもらときいてをります はなしをやめて」などを半紙に清書して教室の壁に二十枚位はり出したりして下さいました。

先生は、「よく世間では、あの人はスジがよいな」と云いますが、そういうことはありません。筆法の修練をすれば誰でも字がうまくなります。」とおっしゃいました。私は下手で汚い字でしたので、誰でもというお言葉に勇気づけられ、女学部卒業後も四ツ谷にあった先生の御宅へ稽古に伺わせていただきました。お宅でのお稽古は、二階の明るいお座敷に紺の毛氈が敷かれ、正座して先生の前で懸腕で半紙に書くのですから大変緊張しました(机はありませんでした)。かなは隣室で、机に向かって倭漢朗詠集より和歌を一首づ、書くことで、文字の稽古だけでなく古歌にふれるよろこびを覚ええました。

戦雲が益々重くなるなかで、先生は陸軍病院へ傷病兵の指導にもお出掛けになり、御多忙になりました。玉江先生(先生の御母様)に見ていただくこともあり、節先生(先生のお姉様)のお手本をいただいて帰る日もありました。それも昭和十八年頃まで、十九年には空襲がはげしくなり、御宅へ伺うことも出来なくなりました。そして、戦後の混乱につづいて、結婚、主人の転勤、家事育児等に追われて三十年ばかりの空白の期間が過ぎてしまいました。

昭和四十九年、次男も大学を卒業し社会人にな

りましたので、それを機会に、先生からのお勧めもあって再入門させていただきました。以来、二十余年先生の最晩年の御薫陶を受けることが出来ましたことはまことに有難いことでありました。文化学院にての先生との出会いが、書道ばかりでなく、私の生涯を通じての大きな存在となったのでした。私は「一期一会」という言葉を考えつ、先生の御人格をお偲びして感謝の気持ちで一杯です。

文字の関まだ越えやらぬ旅人は道の奥をばいかで知るべき
(詠説文歌・狩谷掖齋)

先生はよく「書は晩成の芸術」とおっしゃいました。このご遺訓をここに刻んで、私も今後共、少しでも「道の奥」へと歩んで参りたいと念じております。

心のおもむく儘に

内藤君子(紫陽)

小さく声を掛けて障子をあける。いつも障子は真っ白(この障子を私は大きく破いてしまった事がある。これは又アトの話)。

中は静か、K様M様はじめ数人の方々。この方々は女性、たまに男の方にもお逢いしたが教室内では殆ど言葉を交わした事はない。これは私が新米である故もあったろうが。長江先生はいつもお袴

を着けられ、端坐して指導に当って居られた。私も緊張して御前に坐した。先生のお言葉はやわらかく温かく、丁寧にお導びき下された。筆を持つて頂き、筆のおろし方起こし方、横画、垂露、捺など本当に懇切なご指導を頂いた。然し出来ない、書けないと心の中で叫び乍ら稽古を重ね十年。ここで諸先輩七、八人の末席で雅号を頂戴した。これはあくまでも、もっと今まで以上に励めよ、との先生のご温情で早く下されたものと今でも信じて居る。それから三年後に朱筆を持つようにとご指示があり、昭和五十三年二月、TさんNさんが私の前にいらした。自分がお教え頂いた事を今度は間違いない様にお伝えしなくてはならない。段々に進んで千字文に入る時、千字文の何であるかを説明しなければならぬのだが、傍の先生を意識して声は上ずり、口の中でムニャ／＼と云ってTさん解ったかしらと今では申しわけなく思っている。その時先生は吃度おなかの底で笑いをこらえていらしたか、又ハテこれは人選を間違えたかと、ハラ／＼なさっていらした事と想うと今でも顔が火照る想いだ。

その大事な師と平成六年にお別れし、私達も一時は途方に暮れたが、この淡江社の燈を消してはならないと今に至っている。皆さんと力を合わせもっと大きな淡江社にしたいのだが……。

「それはあくまでも正確な書である為、全身で筆法の要諦をつかむ事、そしてそれがやがて己の体

がつくられ繰り返しの習練に依って自分の風をもつくってゆく」この先生のお言葉の他にも、沢山の言葉、又お教えを頂いたが、頭の悪い私には随分抜けてしまっている事があると思う。何かの時にヒョイと出て来る事があり、やはり頭の隅にこびり付いているのを天上の先生が刺激して下さるのかと有難く思っている。

ここでちょっと奥様の事にふれ度い。

奥様には先生をお亡くしになられてより、体調のお悪い時、又お怪我をなさった折も、随分しっかりとお明るく負けないでいらっしやった。今は本当にお元気に何彼とお勉強の様で、齡下の私が見習うことが多く、これからも益々お元気で私の目標となって頂き度いと希う。

又佳い友人に恵まれ、年長である為に皆様に優しく温かく接していただき本当に有難く思っている。これからも皆様にご教示いたゞき乍ら、お邪魔にならない様についてゆき度いと思っている。会報をつくるについて幼稚な文をまとめて見たが、皆さまのを拝見するのが愉しみ、今後は新しい方にもどん／＼書いて下さる様に希ひつ、駄文を了える。



心の中の長江先生

渡辺迪子(蕙芝)

月日の流れは早く、私が淡江社に入門を許されてから、二十余年が経ちました。入門当時の教室の思い出が、今でも昨日の事のように思い出されます。先づ机の配列は今と違い縦に二列両方から向かい合つての稽古でした。

私は毎週午前十時頃には教室に伺つて、自分の番が来るまで、或は長江先生に見ていただいた後、時間の許す限り練習を続け、時には、先生のお書きになられた大学ノートを夢中で写させていたゞきました。その頃の教室は、いつも物音もせず、ほんとうに静寂そのもので、全体に緊張感が漂っていました。長江先生は、一年間を通して常に袴姿の和服を召して、美しい程のお姿でした。お声も小さく、その動作一つ一つも誠にお静かで、凛とした中に、一寸近寄り難くさえ感じられました。が、あまりの上品なお姿に、俗世間からは離れた世界のまるでお公家さまのように強烈な印象を覚えました。何としてもこのすばらしい先生の元で勉強を続けたいの一念で今日までこれでした。又私のもう一つの楽しみは、毎週先生の奥様のすてきなセンスの活け花が拝見出来る事でした。

今の私の心の中の長江先生は、どんな時にも暖かく、優しく、ときには厳しく「稽古を続ける事も才能のうち」とご指導下さったのです。右手人指指に副木を当て、の半年近く悩んだ折も、先生

は「指を使わない様に全体で筆を握って書いてもらんなさい。右手が駄目でも左手があるし、又口でも書けるのですよ」とおっしゃいました。どんな事にも打ち勝って、自分自身に厳しく接する事こそ、稽古を続ける上で最も大切な事だと云うことを知りました。

又こんな事もありました。教室で先生に背を向ける位置に坐って夢中で書いていた時、「渡辺さん、字を書く時呼吸を止めていますね。それでは良い字は書けませんよ。普通に息をしながらもっと気を楽にして書いてもらんなさい」とご注意下さり、私はほんとうに驚きました。後姿からすべてが解ってしまう事に。

その後、バレリーナ、声楽家の例をあげてご説明下さり、いつでも自然体でいなければいけないと、静かにお話下さいました。上手になり度いとあせりを感じた時も、「上手下手ではなく、丁寧に、正確に心をこめて書けば良いのです」と。しかしこれはとてもむづかしい事です。その為には真面目な稽古の必要性をお教え下さったと云うことを、今頃になって強く感じています。深い勉強と日々の稽古の大切さをつくづく感じます。又「活け花の時一つ一つの材料が良くて、全体を見てそのバランスがとれていなければ、美しいとは思えないでしょう」ともおっしゃいました。作品を作り上げる時、いつもその言葉を思い出しますが、仲々むづかしい事です。

折々に伺ったお話を思い返す時、その状態まではつきりと浮かび、とてもお懐かしくなりますが、現実には無理な事、これから、大切なお教えを、改めて思い返し、努力してゆきたいと、心の引き締まる思いでいます。

心を込めて

本 妙子(松園)

私が、長江先生の下に入門しましたのは、昭和四十四年の春、それ以来三十年近く御指導頂きました。

その当時は、教場へ入ると、ぴんと張りつめた静かな空気が満ちておりました。

お稽古の順番を待ちながら練習をしている人、そしてお稽古が終って復習している人、その人達の持つ筆が半紙に当る音が聞える様な気さえたものです。持ち物を整理したりしてガサゴソ音をたてると、お稽古をつけながらも先生の意識がちらりとこちらを向いていらつしやる様に感じられる、そんな雰囲気でした。新参者としては毎回、とても緊張してお稽古に伺ったものです。

五号の筆を使い始めてどの位たったときでしょうか、私の書いたものをご覧になった先生が、「筆の具合はどうですか？見せてもらんなさい」とおっしゃり、お目にかけますと、「こんなに南方の人の腰みのみみたいな筆だと思っ様を書けないでしょう」と自ら立って丁寧に洗って下さり、「少しは

書きよくなるでしょう」とにつこりされました。そんな事があって、次第々々に緊張がほぐれていきました。

お稽古についてはいつも本当に厳しかったと思いますが、少し進んでくると、折にふれて詩文の一部を縦に書いたり、又、或いは横にまとめたりと惜しみなくお手本を書いて教えて下さいました。書や字についてのちよつとした調べ方、墨をすること、紙を切るなど何でもない事がらも、先生御自身がなさるのを拝見しながら何となく覚えていく、そんな感じていろいろなことを教えて頂きました。

後に、先生の助手の様なかたちから講師を務めることになり、最初は堅くなっている私に、「山道を行く時、暗い道を歩く時等、先を歩く者は後から来る人に、水たまりがあるとか、穴があるとか教えてあげるでしょう、それは当然の事でしよう、気楽にしなさい」と励まして下さいました。

長江先生の思い出はいろいろと盡きませんが、書のお稽古については勿論、その他のことも、何よりもすべて心を込めてする、という事をお教え下さった様に思うのです。



書との出会い

大岡明男(瑛川)

「書」と云えるかどうか分かりませんが、私達の年代の者は、小学校に上って初めて、筆で文字を書く「書方^{かた}」というのを習うのが普通でした。

ナンノウ庵

私はそれより一年早く、ナンノウ庵(漢字の表記は不明)という塾のような所で、国語・算術と共に習字を教わりました。ナンノウ庵というのは寺子屋の名残りでしょうか、浜松駅に近く、旧東海道に面したお寺の境内にある平家の建物で、親達も通ったものだとも聞いていました。

先生はお婆さんが一人で、生徒の数は三十名ぐらい、畳敷の広間に坐机を並べて勉強しました。習字のときは、新聞紙で作った草紙に真黒になるまで練習した後、白い半紙を貰って清書をしました。先生は朱筆で添削し、丸をくれたり、時には三重丸の横に「甲ノ上々ホウビアゲマス」などと書いて、褒美として絵葉書を一枚くれました。私の貰った中に、日比谷公園の野外音楽堂の写真があったのを覚えています。

悪ふざけして先生に叱られ、火のついた線香と水の入った茶碗を持って立たされた子もいました。アルミの丸い弁当箱と箸箱の入った袋と鞆を肩から下げて、まだ宿場町の面影を残す商家の露地を抜け、道草を喰いながら近所の子供達と一緒に通ったものでした。

小学校

大正十五年四月に尋常高等小学校の一年生になりました。級友には顔馴染みは何人も居るし、授業も既に習ったものが主ですから、ノンビリし過ぎたのか、成績は一年生の時が最低でした。「書方」は上級になっても学期毎に甲と乙を往ったり来たりで余り芳しいものではありませんでした。

三年生の頃、自宅で、七夕の笹竹に吊るす色紙^{いろがみ}に小筆で「天の川」「天龍川」などと何十枚も書かされたことがあります。書くのは家では私一人なので、イヤになって泣いてしまい、翌朝は早く起こされて、裏の畠にある芋の葉の露を集めて墨を磨り、残りを書き終えたことも思い出されます。

中学校

昭和七年正月東京に出て、四月府立八中に入學しました。中学では二年までペン習字という教科がありました。最近二年の時使った「ペン習字参考帖」というテキストが、書棚の隅から出て来ました。それを見ると、草書の手ほどき、変体仮名、和歌、そして「落花の雪」と題する「東関紀行」の一部が連綿体で載っています。筆者は小学校の書方手本を書いている西脇呉石です。そろそろ「非常時」の声が喧しくなりつ、あったこの頃、他の中学でもこんなものを習っていたのだろうか? すっかり忘れていただけに一寸不思議な気分で見めています。

これ以後、所謂「お習字」とは縁が切れたわけ

ですが、大学受験が近づき、東京商大専門部では、入学試験に作文を文語体で毛筆で書くという課題があることが判りました。それに備えて、日記を文語体で小筆で書き出したのですが、とても長続きせず、翌春の入試も美事失敗でした。

慶應義塾大学書道会

一浪して、昭和十三年春、慶應義塾大学高等部に入学しました。卒業時に更に編入試験を受けて本科経済学部に進み、こゝで慶應義塾大学書道会に入りました。

初めて、「書との出会い」があったと云えるかも知れません。三田山上の学生々活も四年目に入り、講義以外に何か勉強したくなったのでしょうか。この時の心境は、今となつてはハッキリしませんが、学業を終えれば戦場に赴かねばならないというような閉塞感の中で、書道会の入会勧誘ポスターの楷書に清々しさを感じたことは否定できません。

その頃、三田の稽古場は、旧正門(幻の門)の傍にある春日神社の社務所の座敷でした。先生は先代の玉江(文子)先生が、指導に当られ、初日にいきなり、毛氈に坐って、自己流で良いからと「捨生取義是男児」と半折に大きく書かされて面喰らいました。同期生の山岡、松浦君達が親切に面倒をみてくれましたが、既に日吉の子科で三年間、長江先生の教えを受けて来ているだけに、万事落着いていて大先輩に見えました。山岡君を早く失

ったことは、長江先生にとっても、淡江社にとってもまことに惜しまれます。

玉江先生はやさしい笑顔を絶やさず、「一本の毛」と仰言って、筆尖を突きこむ時の一本の毛の動向によって筆の開き方、弾力が決まって来ると教えられました。新しい筆を使う時は、線香の火で、筆先の毛を焼いて調べて下さいました。今回巻頭に載せられた玉江先生の「筆の心」を読むと、あの頃の玉江先生のお姿が目浮かぶようです。

基本筆法の点画を学ぶことによって、今まで適当に書いていた字が、少しづつ淡江合理的書法の文字に染まって行くような気がして、この頃は講義のノートも出来る限り丁寧に書いていたようです。

(以下次号)

大門碑林公園見学記

金丸紀子(紅花)

平成八年十月五日(土) 晴天。淡江社中の親睦を兼ねて山梨県市川大門町の碑林公園見学旅行を実施する。三々五々の集合で十時五十分頃全員が揃い、甲府駅から貸切りバスに乗りこんで四十分程で公園に到着する。園内の施設で用意されたお弁当と季節の葡萄を食した後見学に入る。丘陵地につくられた公園は町営として平成六年にオープンしたもののだが、階段も多く十五基の碑が点在しており、知識豊かな専門の案内係(町が依頼して

いるボランティア)の要領を得た説明を伺いながら移動しても二時間たつぷりかかって、かなり強行軍という印象であった。帰路、書道具店二孝に寄り、小林社長が秦漢時代の古瓦、古印のコレクションの一部を拝見し、思い思いの買物をして夕方四時すぎ甲府駅で解散となる。三十六名の参加であった。

長江先生は淡江社会員相互の親睦のことも心にかけておられたので、この催しも先生のご遺志の実現でもあった。書の学びを通して一つの仲間となった方々との交流がとても楽しくひろがりのあるものであることを改めて確認できたような気がする。先生から直接の教えを乞うことができなかった今、お互いの微力を出しあって勉強していきたいと思っています。



(参考)大門碑林公園の案内をお願いする時は、一週間の余裕をもって申し込むと、見学者の人数に拘らずついていただけます。無料です。

電話〇五五二一七二一〇四九九

(付記)

金丸様には平成六年一月山梨県立美術館に於ける「乾長江書作展」に引きつゞき、今回の碑林公園見学についても大変御世話になりました。心から厚く御礼申し上げます。

当日は汗ばむばかりの晴天に恵まれ、甲斐の山々陽に映えて、武田節そのまゝ、の豊秋の田園風景を楽しみつ、一路目的地へ、園内での昼食、名産葡萄の山盛りも大満足でした。

山腹に復元配置された碑林見学は時間に追われましたが、いづれも見事な精刻で伝統文化と技術の確かさを思いました。折角の案内の名調子も、日頃の不勉強で大部分聞き流して終ったことが残念で、捲土重来又の日を期すべきでありましょう。それぞれ一層の精進を期しながら帰路につきましたが、手を振ってお別れしたご当地道友皆様のご厚情は、平塩岡からの甲府盆地の大眺望と共に心に暖く残りました。

(西岡)



今後の予定について

○第2回見学旅行

昨年秋の甲府郊外碑林公園見学が好評でしたので、今回は川越市内の名刹喜多院境内に立つ乾淡江先生の碑を見学する一日を企画し、既に会員のお手許までお知らせしました。

五月三十一日(土)

西武新宿線 本川越駅前 午前一〇時集合

貸切バスにより、喜多院を含む市内観光、小江戸と呼ばれ、江戸の俤を残す蔵作りの多い街を散策します。

喜多院には、乾淡江先生の書による「岩田翁記功碑」の他由緒ある建物、五百羅漢等があります。昼食は寿庵にて。

会費 貸切バス・昼食代共約一万円

お申込は 各教室の講師又は事務局へ

事務局代表 沢浦 (〇三―三九五〇―一七七八)



○平成九年度 淡江社総会

六月中に開催の予定

詳細決定次第お知らせいたします。

○第21回 淡江社翰墨展

今年は翰墨展開催の年に当たります。

先日会員にお知らせしましたが、これを機会に作品の研究をし、多数の方が出品されて会を盛上げて下さるようお願いいたします。

会期 十一月十二日(水)より十六日(日)まで

搬入日 十一月十一日(火)

会場 麻布美術工芸館

○淡江社だより 第2号発行予定について

十一月の翰墨展に合せて発行の予定でおりますので、原稿をお寄せ下さい。

第1号を読んだのご感想なり、随想、書論、紀行文、和歌、俳句その他、淡江社へのご要望でも結構です。

締切 九月末日

○「百芝文庫」のお知らせ

長江先生が集められた文献、資料、作品等を、亡くなる直前に淡江社にご寄付を受けました。

まことに貴重な品々で、有難くお受けし、淡江長江両先生のお住居の名称「百芝山房」に因んで「百芝文庫」と名づけました。

その後の整理が遅れていて申し訳ありませんが、今後大切に保管すると共に、この公開・活用等について研究努力して行くつもりです。

編集後記

ようやく第一号をお届け出来ることになりました。

会報発行のことが議題に上ったのは昨年の六月頃でありました。第三回有志翰墨展に間に合えばと安易な考えでしたが、なかなかどうして結局は皆様のご協力なしには一步も進まないことがはっきりわかりました。

編者の怠慢でいつの間にか年を越し、花も散り新緑の季節になりました。お許し下さい。

貴重な原稿をいただきました御一人びとりにより厚く御礼を申し上げます。

この小誌が淡江社皆様のお心を結び、長江先生の道に一層御精進される為の一助ともなればと願ってやみません。

「淡江社だより」の題字は、武藤素英講師に揮毫をお願いしました。

おわりに理事長の大岡様にはまたまた扇の要となつていろいろ御世話になりました。 Y・N

発行 淡江社

東京都新宿区中落合二―一七―三

電話〇三―三九五―一八五二

編集委員 西岡安清

金丸紀子・松原美子